「仿製」三角縁神獣鏡の新例と「同笵鏡」

岩　本　　崇*

New example of Triangular-rimmed mirrors displaying animals and divinity motifs and “Mirrors produced from the same mold”

IWAMOTO Takashi

キーワード：三角縁神獣鏡、「同笵鏡」、古墳時代、製作背景

はじめに

小稿は三角縁神獣鏡の新例を紹介し、その資料的意義を述べるものである。ことの発端は、2022 年 8 月 3 日に栃木県足利市にお住まいの岩月達之氏宅をご所蔵の古墳時代倭鏡の実査のために訪れた際に、同氏から 1 点の三角縁神獣鏡の破片資料を示されたところにある。拝見してただちに「同笵鏡」の存在が判明したため、写真撮影と断面図作成をご許可いただき、とりあえずの資料化を実施した。と同時に、破片資料といえどもその資料的価値が小さくないことを認識した。

その後、この「仿製」三角縁神獣鏡の新例を学術的に位置づける必要性があると判断し、あらためて岩月氏のご許可をいただいてここに公表することとした。公表についてご快諾いただいた岩月達之氏には、満腔の謝意を表する次第である。

1.「仿製」三角縁神獣鏡の新例

まずは、新例となる「仿製」三角縁神獣鏡について紹介する（図 1）。当該資料は外区を中心とした 10.5cm × 5.5cm ほどの破片であり、外区文様構成と縁部形態から、三角縁神獣鏡であることがわかる。重量は 72g である。部分的に鉄銹が付着しており、鉄製品と近接して副葬されたことがわかる。

図 1　「仿製」三角縁神獣鏡の新例（個人蔵鏡）

＊島根大学法文学部社会文化学科

1. 外区上面の鋳放し

2. 縁端面の研磨条痕

図２　「仿製」三角縁神獣鏡の新例（個人蔵鏡）の細部

縁部を含めた外区幅は 3.6cm 程度であり、縁部は幅約 1.0cm × 高さ約 8.5mm である。外区文様は３帯からなり。外側から外向きの鋸歯文、２条からなる複線波文、外向きの鋸歯文の順に文様帯がめぐる。内外区の境には小さな段差があり、外区が内区よりわずかに厚くなる。なお、外区斜面には文様がほどこされない。

外区の内側にある内区外周部は幅が約 1.6cm と広いが、文様帯は獣文帯のみである。遺存する範囲においては乳を２つ確認でき、獣文帯を区画する。乳は直径 1.1cm 程度、高さ 6.5mm 程度の、高さはないが大ぶりのものである。各区画には、上から単魚、鳥、亀とみられる図文が配される。単魚像はわずかに立体的なふくらみをもち、細線で鱗や鰭をあらわす。鳥像も細線表現によるもので、頭から胴部をＳ字状にあらわし、両翼に平行線文を付加したものである。亀像には神像風の眼をもつ頭部と、小さな弧文を連ねた亀甲表現のある胴部がみられる。内区主文部と内区外周部は圏線によって区画される。

鏡背面は全体に外区文様の鋸歯文の枠線が残るなど粗い表面状態をとどめており、仕上げの研磨はほとんどほどこされない。また、ところどころに笵傷とみられるごく小さな瘤状のふくらみがある。これにたいし、鏡面は平滑な表面状態であり、仕上げの研磨がなされる。また、縁端面には鉄銹が付着するが、銹の下に横方向の細かな研磨条痕、縁端面でも縁頂部付近は斜め方向にやや粗い研磨条痕が確認される。いずれも仕上げの研磨の一環としてほどこされたものであろう。

２.「同笵鏡」の認定

三角縁神獣鏡には同一の鋳型を複数回にわたって使用する「同笵鏡」が多数あり［梅原 1944 ほか］、その分布が明瞭な中心性をもつことから古墳時代の社会関係を探るうえで有効な考古資料としてとりあつかわれてきた［小林 1955 ほか］。「同笵鏡」については厳密な意味での同じ笵（鋳型）による製品ではないとの異論もあるが［樋口 1953、後藤 1958、笠野 1994、立木 1994 ほか］、本質的には同一文様の鏡が一元的かつ共時的に製作されたかどうかが議論される必要がある［岩本 2020a:4］。そしてこの点を解決するには、「同笵鏡」とされる鏡の同一性と差異性を吟味することが重要な意味をもつと考える。こうしたことからも、三角縁神獣鏡については「同笵鏡」の有無を確認することが議論の出発点

になるといっても過言ではない。

「同笵鏡」の探索　「仿製」三角縁神獣鏡の新例（以下、個人蔵鏡）の「同笵鏡」の有無の確認、ならびに候補の抽出にあたり、個人蔵鏡の以下の特徴に注目する。そのうえで、既知の三角縁神獣鏡から類例を抽出する[(1)]。

Ⓐ縁部の突出が小さく、外区幅は3.6cm程度と非常に広い。内外区の境界にはわずかな段差がある。以上から､外区形式は「仿製」三角縁神獣鏡の６式となる［岩本2003］。

Ⓑ内区外周部が獣文帯のみからなり、櫛歯文帯を欠く。これは「仿製」三角縁神獣鏡の新相資料の特徴である［岩本2003］。

Ⓒ内区主文部と内区外周部を断面三角形の界圏、あるいは断面蒲鉾形の圏帯ではなく、圏線によって区画する。これも「仿製」三角縁神獣鏡の新相資料がもつ特徴の一つである［岩本2003］。

Ⓓ外区文様が外向鋸歯文・複線波文・外向鋸歯文の３帯構成である。

上記の特徴のうちⒶ・Ⓑ・Ⓒは相互に関連性が高く、これらを満たすのは、242・243・246・248・249・250・252・256鏡の８種となる。このうち、さらにⒹの特徴を備えるのは、242・243・256鏡の３種のみとなる。そして、これら３種と個人蔵鏡について、内区外周部の獣文帯の構成や表現を比較したところ、個人蔵鏡には243鏡（三角縁獣文帯三神三獣鏡）と一致する部分があることを確認できた。

「同笵鏡」の認定　「同笵鏡」を認定するうえで､同一文様であることは必要条件であり、

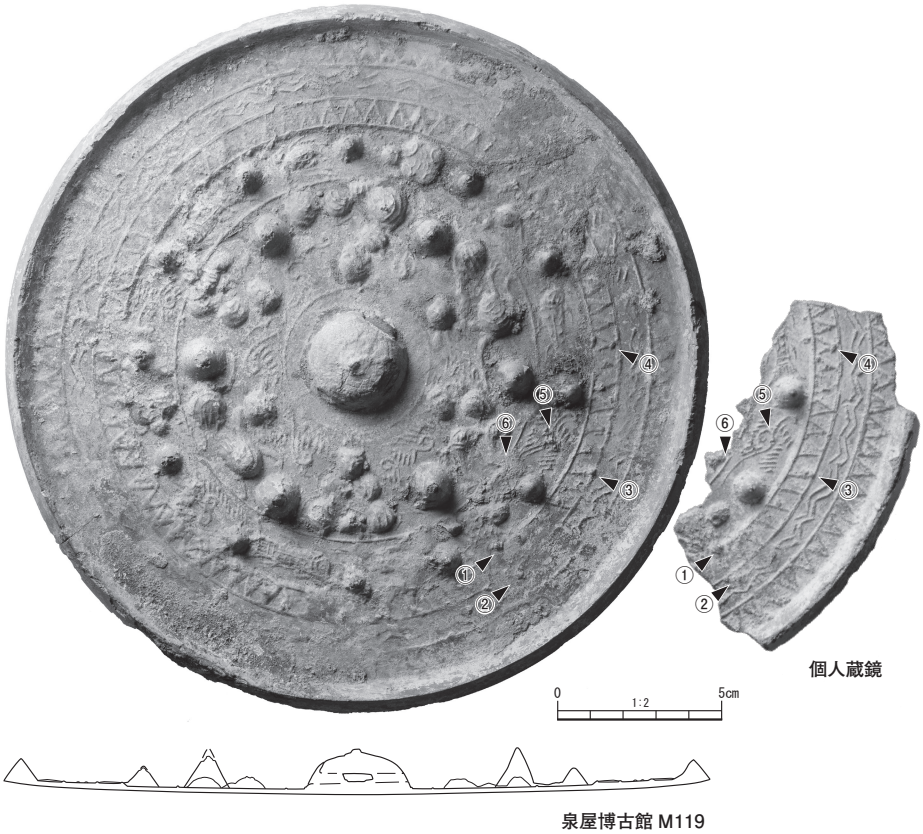

図３　個人蔵鏡と泉屋博古館 M119 の比較

それと同等かそれ以上に重要な指標が笵傷の一致と拡大である。そこで、個人蔵鏡と243鏡に該当する泉屋博古館M119（以下、泉屋M119鏡）を比較したところ、図３のとおり①・②・③・④などにみる笵傷の一致を確認できた。とくに①・②については、個人蔵鏡の笵傷が泉屋M119鏡で拡大している状況もみとめられる。

さらに、⑤と⑥においては、個人蔵鏡では笵傷が存在しなかった部分に、泉屋M119鏡では笵傷が発生していることも指摘できる。

こうした笵傷の一致・拡大・増加から、新例の個人蔵鏡は三角縁神獣鏡目録243鏡（泉屋M119鏡）の「同笵鏡」であり、個人蔵鏡→泉屋鏡の順で鋳造されたと考える[(2)]。

３．資料的意義

(1) 年代的位置

「仿製」三角縁神獣鏡の新例となる個人蔵鏡は、243鏡（三角縁獣文帯三神三獣鏡）であることが明らかとなった。この243鏡は外区・鈕・乳・内区区画の特徴から、「仿製」三角縁神獣鏡のⅠ群に相当し［岩本2003］、５段階からなる「仿製」三角縁神獣鏡の製作段階の第４段階に比定できる［岩本2020a］。三角縁神獣鏡の終焉段階に位置づけられる鏡群となる［岩本2005］。

これら「仿製」第４・５段階の終焉段階鏡群は、古墳時代広域編年Ⅵ期（古墳時代中期前葉古相）以降の古墳や遺跡から出土し、その絶対年代は４世紀第４四半期ごろと推定される［岩本2020 a］。

(2) 終焉段階鏡群と「同笵鏡」

終焉段階鏡群の特徴の一つに「同笵鏡」の少なさがある。しかし、新例となる「仿製」三角縁神獣鏡が終焉段階鏡群でありながらも「同笵鏡」が確認されたことで、この段階の「同笵鏡」の少なさについては再考しておく必要があると思われる。そこで以下では、終焉段階鏡群における「同笵鏡」の少なさについて、これまでとは異なる説明を加えてみたい。

三角縁神獣鏡の生産を長期的に追跡すると（表１）、「同笵鏡」は３面程度がもっとも多く、とくに「仿製」鏡段階でも類型化に転じた第２・３段階はその数も増加していることから、「同笵鏡」によって量産をおこなっていたようすが明らかである。そして終焉段階に至ると、そうした状況から「同笵鏡」が減少する傾向がよみとれる。そのうえで、Ⅰ・Ｊ群には同じ規格においても個体差が目立つ点から規格の弛緩がみられると評価して、これを量産体制の崩壊を反映したものとみなしたのである［岩本2020a:173］。

しかし、あらためて終焉段階の諸

表１　三角縁神獣鏡生産量の推移

	製作動向による区分	製作段階	同笵鏡平均数	規格鏡群数	規格平均数	総面数	製作年代（暦年代）
三角縁神獣鏡	成立期	舶載第１段階	2.1	4	6.3	25	239年～240年代初頭
	定型・量産期	舶載第２段階	3.0	17	13.1	226	240年代
	安定期	舶載第３段階	2.8	9	6.7	67	250年代
		舶載第４段階	2.9	6	7.2	43	260～270年代
	低迷期	舶載第５段階	2.3	4	8.8	39	280年代
「仿製」三角縁神獣鏡	復興期	「仿製」第１段階	2.1	4	6.8	27	290年代～4C初頭ごろ
		「仿製」第２段階	4.4	1	22.0	22	
		「仿製」第３段階	3.4	3	13.7	41	4C前葉ごろ
	終焉期	「仿製」第４段階	1.2	2	15.5	31	4C中葉ごろ
		「仿製」第５段階	1.5	1	6.0	6	

〔凡例〕総数には鏡群に属さない資料を含めるが、鏡種を確定できない資料は含めていない。

鏡群を細かくみると、「同笵鏡」数におけるＦ群とＩ・Ｊ群の違いにくわえ、Ｉ群については鏡種の数の多さから生産量がけっして少なくないことがわかる（表２）。Ｆ群とＩ・Ｊ群との差は文様表現の違いなどからＦ群が系統Ｉ、Ｉ・Ｊ群が系統Ⅲに属しているため、Ｆ群の「同笵鏡」の非採用傾向とＩ・Ｊ群の採用傾向は製作者集団の差に起因する可能性があると考える。いっぽうで、「仿製」第４段階はＦ群とＩ群が生産され、「同笵鏡」平均数が第３段階の35%程度でありながら、生産総面数は76%程度を維持している。そうした状況にあって、Ｉ群の鏡種の多さと「同笵鏡」の存在にたいする生産量の少なさは不可解だといわざるを得ない。要するに、鋳型数（鏡種）はむしろ「仿製」第３段階より第４段階のほうが多いにもかかわらず、「同笵」技法による量産をおこなっていないため生産量じたいは少ないのである。だとすれば、終焉段階鏡群の生産にたいして、あえて「同笵」技法を採用しないあるいは採用できなかった事情を想定したほうがその製作背景を説明しやすいのではなかろうか。

鋳型製作は十分におこなわれ、しかも「同笵」技法がみとめられながらも、生産量が減少している点からは、たとえば青銅原料の調達が困難となったために、生産を縮小せざるを得なかったといった事態も想定されよう。少なくとも、「同笵鏡」が存在するにもかかわらず、積極的には「同笵鏡」が製作されない状況から、「仿製」三角縁神獣鏡が生産の終焉を迎える背景には、技術的な問題ではなく生産体制の維持を困難とする突発的な事態を考慮しうる余地があるといえよう。それは

表２　三角縁神獣鏡の終焉段階鏡群と各例

鏡群	鏡No.	面径（cm）	同笵鏡数	配置	鈕座	内区乳数 主文部＋外周部	内区区画	内区外周文様帯	外区文様
Ｆ群	220	22.0	1	K2	なし	6 ＋ 10	界圏	単魚、走獣、走獣、走獣、象？、走獣、蛙、単魚、象、走獣	鋸波鋸
	220a	22.0	1	K2	なし	6 ＋ 11	界圏	双魚、走獣、走獣、走獣、蛙、双魚、走獣、松毬、双魚、走獣、象	鋸波鋸
	220b	21.5以上	1	K2	円圏	6 ＋ 11	界圏	双魚、走獣？、走獣？、単魚、走獣？、象？、単魚、双魚、象？	鋸波鋸
	221	22.1	1	K2	円圏	6 ＋ 10	界圏	双魚、走獣、双魚、象、単魚、走獣、走獣、蛙、走獣、蛙	鋸波鋸
	218a	約 21.5	1	K2	有節重弧	6 ＋ 11 以上	界圏	双魚、不明、走獣、蛙、走獣、蛙、走獣、走獣、象、走獣	鋸波鋸
	221a	23.5	1	K2	なし	5（6）＋不明	界圏	双魚、走獣、蛙、象、不明	鋸波鋸
	222	22.0	1	K2	なし	6（6）＋ 11	圏線	双魚、走獣、蛙、象、松毬？、不明	鋸波鋸
	218	21.4	1	K2 変	圏帯	（5）＋ 10	界圏	双魚、走獣、蛙、象、松毬、不明	鋸波鋸
	219	22.6	1	K2 変	円圏	5（6）＋ 11	界圏	双魚、走獣、蛙、象、松毬、獣面、単魚、細線鳥、不明	鋸波鋸
Ｉ群	241	21.9	1	K1	有節重弧	6 ＋ 9（11）	界圏	双魚、象、鳥、玄武、亀、蛙	鋸波鋸
	241a	23.5	2	K1	有節重弧？	6 ＋ 10	界圏	双魚、象、鳥、玄武、亀、蛙	鋸波鋸
	257	22.2	1	K1	複波	5(6)＋ 8(10)	界圏	単魚、走獣、蛙、獣面、不明	鋸波鋸
	240	23.4	1	K1	円圏＋珠	6 ＋（12）	圏帯	双魚、単魚、象、蛙、亀、不明	鋸波鋸
	239	21.7	2	K1	重弧	6 ＋ 12	圏帯	単魚、走獣、亀、細線唐草文、蛙、神顔＋蛙	鋸波鋸
	238	21.1	1	K1	なし	6 ＋ 12	圏帯	単魚、蛙、細線鳥、松毬？、不明	鋸波鋸
	256	21.5	1	K1	円圏＋珠？	6 ＋ 12	圏線？	獣文帯（細部文様不明）	鋸波鋸？
	243	21.6	2	K1 変	円圏	6 ＋ 12	圏線	単魚、蛙、亀、細線鳥、不明	鋸波鋸
	242	21.9	1	L1	複波	6 ＋ 12	圏線	単魚、走獣、象、蛙、獣面、不明	鋸波鋸
	248	21.3	1	K1 変	円圏	5 ＋（8）	圏線･圏帯	亀、細線唐草文、細線鳥文、擬銘？、不明	鋸（内）波鋸
	254	20.5	1	K1	なし	6 ＋ 8	圏帯	単魚、神像、細線鳥文、不明	櫛波鋸（内）
	245	20.8	1	K1	なし	6 ＋ 9	圏帯	単魚、神像、細線唐草文	櫛波鋸（内）
	246	20.4	1	K1 変	なし	5 ＋ 8	圏線	単魚、神像、細線雲文、細線魚	櫛波鋸（内）
	250	21.2	3	K1	圏帯	6 ＋ 12	圏線	細線唐草文、細線鳥文、不明	鋸波
	249	20.6	2	K1	なし	6 ＋ 9	圏線	細線唐草文、細線鳥文、不明	波鋸（内線）
	252	20.9	1	K1	なし	6 ＋不明	圏線	細線唐草文、不明	鋸波
Ｊ群	247	21.5	1	K1	複波	6 ＋ 8	圏線	細線唐草文、細線鳥文、細線魚、不明	波鋸（内線）
	244	21.6	1	K1	複波	6 ＋ 8	圏線	細線唐草文、細線鳥文、不明	波鋸（内線）
	253	20.0	1	K1 変	円圏	5（6）＋ 9	圏線	単魚、蛙、亀、細線唐草文	波鋸（内線）
	255	20.7	3	K1 変	円圏	5 ＋ 9	圏線	単魚、亀、細線唐草文	波鋸（内線）

〔凡例〕 鏡 No.：三角縁神獣鏡目録［岩本 2020b］の番号。各文様は内側からの配列を表記。〔・〕：並列、〔＋〕：上。乳の（　）内数字は欠損・補修等の復元値。外区の鋸歯文は外向浮彫表現が通有であるため、それ以外を、鋸（内）：内向鋸歯文、鋸（線）：線彫表現の鋸歯文と表記。

終焉段階鏡群の製作が西晋の滅亡（316 年）後と想定されることと［岩本 2020a:176］、けっして無関係ではないと考える。

まとめ

小稿では、「仿製」三角縁神獣鏡の新例を紹介するとともに、「同笵鏡」の確認を契機に終焉段階の三角縁神獣鏡の製作背景について再考を試みた。わずか 1 例の「同笵鏡」の増加にすぎないが、それをもとに「同笵鏡」のあり方をみなおすことによって、三角縁神獣鏡生産が終焉を迎えた背景にあらたな説明を加えることが可能となった。

小稿によって地道な資料の探索、ならびに資料に即した再検討がもつ学術的意義を少しでも示せたとしたら幸いである。

註

（1）三角縁神獣鏡の各例を指示するにあたっては、三角縁神獣鏡目録（最新版）の目録番号に依拠し、◯鏡と表記する。

（2）なお、個人蔵鏡より泉屋鏡では全体に外区文様の表出が不明瞭であるが、これも複数回使用にともなう笵の痛みを反映した変化である可能性が高い。

引用文献

岩本　崇　2003「「仿製」三角縁神獣鏡の生産とその展開」『史林』第 86 巻第 5 号　史学研究会　pp.1-39

岩本　崇　2005「三角縁神獣鏡の終焉」『考古学研究』第 51 巻第 4 号　考古学研究会　pp.48-68

岩本　崇　2020a『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房

岩本　崇　2020b「附編 1　三角縁神獣鏡目録」『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房　pp.487-492

梅原末治　1944「上代鋳鏡に就いての一所見」『考古学雑誌』第 34 巻第 2 号　日本考古学会　pp.1-14

笠野　毅　1993「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第 13 巻 東アジアの中の古墳文化　雄山閣出版　pp.172-187

後藤守一　1958「古墳の編年的研究」『古墳とその時代』1 古代史研究 3　朝倉書店　pp.1-220

小林行雄　1955「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第 38 巻第 1 号　史学研究会　pp.1-20（1961『古墳時代の研究』青木書店　pp.137-159 に補訂再録）

立木　修　1994「後漢の鏡と 3 世紀の鏡―楽浪出土鏡の評価と踏返し鏡―」『日本と世界の考古学―現代考古学の展開―』岩崎卓也先生退官記念論文集　雄山閣出版　pp.311-324

樋口隆康　1953「同型鏡の二三について―鳥取県普段寺山古墳新出鏡を中心として―」『古文化』第 1 巻第 2 号　日本古文化研究会　pp.14-22（1983『展望アジアの考古学』新潮社　pp.9-20 に補訂再録

図表出典

図 1・2　出土地不明（岩月達之氏蔵）。

図 3　出土地不明（泉屋博古館蔵〔M119〕、岩本 2020a より引用）、出土地不明（岩月達之氏蔵）。

表 1・2　岩本作成。